



日本大学 理工学部 社会交通工学科

平賀 千尋

かつて水辺環境の魅力的な都市が多数存在していたが、現在各地で行われている多くの都市再生は周辺環境との調和を無視した画一的な開発が行われ、人間的スケールを無視した超高層ビルが乱立している。さらにインフラについても自動車が優先され、川の魅力は激減している。今後の都市再生を、かつての自然や環境との共生を考慮した有機的な再生に方向転換する必要があると考える。そこで、都心で利活用可能な神田川・日本橋川に着目し、水上交通の復活とそのインフラ拠点を提案し、水上交通と既存陸上交通の結節を考慮した新しい交通システムを提案するとともに、人々の意識を川へ向けさせることを理念とした環境共生の都市再生モデルを日本橋・秋葉原において提案する。



講 評

今は息を潜める都心の川には、江戸の都市経済を支えた舟運の記憶と、近來の都市構造シフトが性急であったことを物語る爪跡が残る。

作者は回遊性のある水域に着目し、水上交通ネットワーク整備を軸に、都心の水辺の魅力復活を提案している。その拠点として日本橋周辺と秋葉原を抽出し、陸上交通とリンクさせ、その結節点となる場を具体的に描き出している。綿密な調査をもとにしており、プレゼンテーションも緻密で説得力を持つ。今後、今回の成果に満足せず、より広域なネットワーク、より精細な歴史と現状分析に基づく提案の深化を志して欲しい。なぜならば昨今、港湾行政の柔軟化や、日本橋上空の高速道路の地下化および周辺界隈の路地復活などが実現の兆しを見せており、優れた提案の受け皿が整いつつあるからだ。

今後の研究において、橋や、プロムナードのペープ、手すり、照明など、「水辺にふさわしいデザイン」はどうあるべきか（少なくとも郊外の公園や、建築的過ぎるディテールとは違うだろう）、これもテーマのひとつにすることを君に提案したい。

[審査員 柳瀬寛夫]